

# 中世ヨーロッパの祭礼行列

## －君主の入市式 *adventus regis*－

*Adventus regis* : Ceremonial Entrance Procession in Medieval Europe

村松 綾

MURAMATSU Aya

### 1. はじめに

金沢市民が楽しみにし、多くの観光客が全国から集まる金沢百万石まつりは2024年6月に73回を数え、特に百万石行列はイベントの目玉でもある。古今東西、行列は町や君主の威光を伝えるものであるが、本稿ではヨーロッパにおける祭礼行列の中から、君主の入市式 *adventus regis* を取り上げ、その形成過程と構成について考察を加える。

入市式というとあまり耳なじみがないかもしれないが、都市の支配者たる君主がその支配都市に入城する際に行われる歓待儀礼で<sup>1</sup>、現代では国王戴冠に伴う凱旋行進や、教会の長が執り行う宗教行列が一般的に想起されるだろう。厳密に言えばルネサンス以降の凱旋式は、中世の入市式と完全に同等というわけではないのだが、まずは視覚的にイメージできる華やかな、もしくは荘厳な祝祭を伴う祭礼行列を思い浮かべながら本稿を辿っていただきたい。

R.ストロングは、16世紀以降ヨーロッパの各地域では、政治体制が徐々に、いわゆる「絶対主義」へと移行する中で、中世では重視されていた支配者と被支配者の間の対話の要素が消え、「視覚」の重要性が高まったことで劇場型祝祭行列が広まったと指摘する<sup>2</sup>。例えば『芸術家列伝』で名を知られるG.ヴァザーリは、メディチ家のアレッシンドロとフランチェスコ1世、それぞれの結婚式の祝祭を担当しており<sup>3</sup>、A.デューラーも神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン1世のために組版画《皇帝マクシミリアン1世の凱旋門》や彩色素描《大凱旋車》(図1)等を

制作したことが知られている。デューラーの凱旋門は紙に刷られた版画だが、16世紀の入市式では実際にアッパレートと呼ばれる仮設建造物の形式で、凱旋門や記念柱、神殿、オベリスクなどが設置された。加えてタブロー・ヴィヴァン(活人画)が演じられるなど、非常にスペクタクルなものであったとされている<sup>4</sup>。

これらルネサンス期の入市式のイメージを取り込んで近世の凱旋行進は形成された。岩谷秋美氏は、皇帝フランツ・ヨーゼフ1世と皇妃エリーザベトの銀婚式祝賀行列(1879)の演出を担当した芸術家ハンス・マカルトが、前年に描いた歴史画《皇帝カール5世のアントウェルペン入城》(1878)の中に画家デューラーを登場させることで、19世紀の銀婚式祝賀行列と16世紀のカール5世の入城行進、そして、後世における凱旋行進のイメージを決定付けたその先代の中世最後の騎士マクシミリアン1世の凱旋をも多層的に結びつけたことを指摘している<sup>5</sup>。

ルネサンス期に関してはこれら十分な考察がなされているが翻って中世について考えてみると、中世・近世の境に差しかかると国内外問わず記述は減少し、中世から近世への連続性に関してはその有無も含めほとんど言及が見当たらない。

近世の凱旋行列がルネサンス期のそのイメージを取り込んで多層的な意味合いを内包しているのだとしたら、ルネサンス期の凱旋式や祝祭行列も、その前の時代のイメージや意味合いを多層的に取り込んでいるのではないだろうか。研究の厚いルネサンス以降と比べ、ルネサンス以前の入市式は図像的な

資料が少ないことも手伝い、日本では美術史における研究があまり多くはない。本稿では君主の入市式の形成過程を古代から中世までたどり、次いで構成要素を解説することで、その歴史的層性に関し考察を加える。

## 2. 入市式の形成過程

### (1) 古代ギリシア、古代ローマ、キリスト教ローマ

スイスの歴史家H.C.パイヤーはE.ペーターソン、A.アルフェルディらの研究<sup>6</sup>に基づき、君主の入市式の原型が古く東方<sup>7</sup>における君主崇拜儀礼に由来することを指摘し、君主の到着が神々の登場 *θεῶς ἐπιφανής* と同一視されていることを説いた<sup>8</sup>。その後、ドイツの歴史家W.ドツァウアーもアルフェルディの研究を基に、君主の到来 *ἡ παρουσία ἡ ἐπιδημία* が東方では神聖な意味を持ち、前5世紀の段階で既に古代ギリシアで祭礼が行われていたとしている<sup>9</sup>。古代の体育競技での勝者の歓待や、ヘロドトス『歴史』に登場するアテネの政治家テミстокレスのスパルタでの歓待、アリストファネス『鳥』における君主への賛美の詩はこの文脈上にあると考えられ、これら儀式はアレクサンドロス大王の死後に後継者ディアドコイの降誕祭として引き継がれた。プトレマイオス朝エジプトではディアドコイだけでなく高官の歓待も行われるようになり、この慣行はプトレマイオス朝後も廃れることなくローマへと受け継がれたといわれる<sup>10</sup>。

古代ローマやその周囲の境界<sup>11</sup>では、高官の到着予定が事前に伝達され、その情報をもとに到着を歓迎する儀式が執り行われた。歴史家スエトニウスによれば、アウグストゥスはローマや属州の州都での盛大な歓待を避けるべく、夕方や夜に到着するように敢えて旅程をずらしたらしい。共和政期に行われた境界での歓待や、ローマに凱旋する際の勝利の行進の道行<sup>12</sup>は、その後の君主の入市式にも引き継がれるが、継承されたのはそのみにとどまらない。幸福と平和をもたらす「救世主」としての伝統的な君主像<sup>13</sup>がローマの政治家へと引き継がれ、それが

更に発展して〈アウグストゥスの到来 *adventus Augusti*〉の祭典<sup>14</sup>となりローマの帝政期に重要な意味を持った<sup>15</sup>。

イタリアの政治的共同体キウィタスの中には、プリンケプスの入市の日を1年の始まりとみなして祝う都市があり、東方でも皇帝やその一族が到着するたびに年代記を新しく作成していた。これらはローマに適合していったヘレニズムの祭礼の現れと考えられている<sup>16</sup>。古代ギリシアの神々は海を渡ってやってくる<sup>17</sup>と信じられていたことから、貴人の訪問時に神々の復活祭を伴うこともあり、ローマ皇帝や小アジアの属州総督が海を越えて到着すると、神々になぞらえられて恭しく出迎えられた<sup>18</sup>。その様子は硬貨に刻印されて現在にも伝わっている（図2-1・2）<sup>19</sup>。

古代ローマの歓待の儀式は、城壁の隣接地など常に一定の場所で行われた。歓待には総司令官、総督、司令官、祭司、統率者、若者、大衆など様々な集団が参加し、白い衣服と古代ギリシアの体育競技に由来する月桂冠といった冠の着用、加えて蠟燭や松明、ランプの携行が定められていた。乳香が焚かれ香油が注がれる中で神殿が扉を開き、神々への供物がささげられた<sup>20</sup>。

その後、ローマにキリスト教が導入されると、古代ローマの歓待儀礼とキリスト教の信仰のイメージが結びつき、儀礼には更にキリスト教の要素が加わる。例えば、群衆が棕櫚の枝を持ってキリストを迎える〈イエルサレム入城〉<sup>21</sup>（図3）のイメージや、ランプを持って花婿を迎える賢い娘たちと愚かな娘たちのアレゴリー<sup>22</sup>は、ディアドコイの降誕祭の影響を受けて形成されたとされる<sup>23</sup>。他にもパウロの『テサロニケ人への第1の手紙』<sup>24</sup>の中では、古代末期の君主の歓待に関する用語である *παρουσία τοῦ κυρίου* がキリストの来迎を、*ἀπαντήσις τοῦ κυρίου* がキリスト再臨を示すものとして使用されている。キリスト教受容以前の儀式では神像や英雄の骨が君主に掲げられていたが、受容後は十字架と聖遺物に取って代わり、古代の神々へ捧げる供物の儀式がキリスト教の礼拝へと転じた。古代ローマでは当初はラヴェン

ナ総督やローマのパトリキウスが到着した際に入市式が行われていたが、キリスト教ローマの時代に至ると司教も聖別されたキリストの代理人として迎えられようになり、聖遺物や使者の魂もあの世で同様の歓待を受けるというイメージが形成された<sup>25</sup>。

こうして入市儀礼は、ヘレニズムの時代の神々の来迎、「ローマ皇帝=救世主」の勝利の凱旋、そしてキリスト来臨のイメージを並行的かつ重層的に取り込んで中世へと引き継がれた。

## (2) フランク王国

西ローマ帝国の滅亡(476年)後、入市式の慣行はゲルマン諸部族と東ローマ帝国に引き継がれた<sup>26</sup>。フランク王国では、メロヴィング朝の王グントラムが585年の聖マルティヌスの祭日7月4日にオルレアンを訪れたときの様子がトゥールのグレゴリウスの手により残されている<sup>27</sup>。グレゴリウスの記述によれば、グントラムが到着すると大勢の群衆が手には記章や旗を持ち、賛歌を歌いながら押し寄せ、ラテン人、シリア人、ユダヤ人が各々の言葉で「国王万歳。そしてかれの王国は諸民族の上に数え切れぬ年数の間続きますように」<sup>28</sup>と叫びかけ、更にユダヤ人は「全ての民族はあなたを敬い、あなたに対して膝を折り、そしてあなたに従いますように」<sup>29</sup>と叫んだという。この様子からは古代末期ローマの儀礼形式が踏襲されていることが確認できる。

司教都市や修道院といった、キリスト教上重要な拠点で王の入市式が定着したのは、カロリング朝以降とされ、カロリング期の記録にはローマに入市したカール大帝の2例と東フランク王ルードヴィヒ2世の1例が残されている。『教皇の書*Liber Pontificalis*』によれば、国王カールは774年4月の復活祭の日曜日にローマを訪問している。ローマへと続くカッシア街道上にあり、かつブラッチャーノ湖にも程近い*Novas*という地点に到着したカールは、そこでローマ教皇の代理人である審判人と旗持ちに出迎えられ、彼らとともにローマへと向かった。その後、更にローマ市の北西にあるマリオ山のふもとで追加の代表団に出迎えられ、フランク王国国王兼「ローマ

人のパトリキウス」<sup>30</sup>として入市している<sup>31</sup>。

第2章で詳説するが、このように目的地から少し離れた地点で歓迎の出迎えを行い、それら出迎えの集団が随行して入市する形式は後の時代にも引き継がれている。カールのローマ入市のもう1例、800年のローマ皇帝戴冠の際も、ローマから12マイル離れたところにあるマイルストーン(標石)でローマ教皇とローマの人々に出迎えられ、それからローマ市へと移動している<sup>32</sup>。ルードヴィヒ2世についても、『教皇の書』中にローマ入市の際に聖職者によって十字架とともに出迎えられている記録が残されている<sup>33</sup>。

パイヤーは、ゲルマン諸部族において王の儀礼的歓待は元々あった習慣ではなく、ローマ帝国やキリスト教徒との接触を通じて新たに取り入れたものであることを指摘している<sup>34</sup>。神の代理人とみなされたカロリング朝の王は、その登場を聖書のキリストの復活と関連付けて解釈された。このような政治と神学との密接な結びつきはキリスト教の教父の手で広められ、入市式は聖職者の周囲で定着していった<sup>35</sup>。

## (3) 神聖ローマ帝国

フランク王国期に「慣習」として定着した国王の入市式だが、「制度」として確立したのは中世盛期の神聖ローマ帝国だと考えられている。ザクセン朝とザーリア朝の初期では入市式を受ける資格は俗人においては国王と皇帝だけにあり、国王特権である入市式が他の諸侯に対して行われることがないように厳しく規定された。教会もまた入市式を供する対象を聖別され塗油された教会公認の王のみとして<sup>36</sup>、1221年に教皇ホノリウス3世が出した教勅の中でも塗油された皇帝、国王、高位聖職者の三者に制限している<sup>37</sup>。そのため、それ以外のものが儀式を受けると処罰を受けたり、そもそも儀式の執行を拒否されている<sup>38</sup>。逆に対立王<sup>39</sup>をその支持者が王のごとく迎え入れた例もあるが<sup>40</sup>、シュタウフェン朝以降このような事件は聞かれなくなり、領邦君主権力の強化・確立が進んだ14世紀に至ると、領邦君主が入市式を行っても問題視されることもなくなった。教



会が作成する入市式の規定を記した儀典書*Ordo*の中にも諸侯やその妃のための規定が確認されるようになる<sup>41</sup>。

中世盛期の君主の入市式は、君主に近い聖職者や有力者たちによって書き留められ、何か特別な事件が付随していない限りはごく短い典型的な記述に留まることがほとんどである<sup>42</sup>。対して中世後期には都市の経済力が増し、司教都市以外の都市にも君主が訪問するようになったことから、入市式も都市年代記の中に登場するようになった<sup>43</sup>。年代記の中では、都市が式次第を相互に確認し合っている記述も見られる<sup>44</sup>。

現存する最古の王の歓待の規定は、1042/43年頃にベネディクト会のファルファ修道院で書き残されたものである。ファルファ修道院はその設立にクリュニー修道院長オドが関わっており、クリュニー修道院には多くの典礼が保存されている。ファルファ修道院の規定には王を出迎える際の聖職者の行列の構成<sup>45</sup>、及び王を教会まで導く際に歌われる聖歌<sup>46</sup>が定められている。ただし1063年から1087年の間に残されたマルセイユのベルンハルトによる記述やヒルザウ修道院、ライヒェナウ修道院の儀典書など、似通った内容の規定は11世紀に至る所で見られる<sup>47</sup>。これより前のカロリング朝やザクセン朝の時代にも君主のための頌歌は数多く存在していたが<sup>48</sup>、11世紀後半に行われたグレゴリウス改革に代表される教会・修道院改革の結果、儀礼の式次第やテキストの選択といった本質的な部分以外の内容は失われてしまった<sup>49</sup>。これら11世紀の数々の儀典書を踏まえて成立したのが、1293年から1295年の間に書かれた南フランスの司教グイレلمス・ドゥランティスによる『ローマ司教定式書 *Pontificale Romanum*』に収められた、王（またはローマ皇帝）と王妃（またはローマ皇妃）それぞれのための歓待儀式用儀典書2種<sup>50</sup>で、中世後期に成立した多くの儀典書に影響を与えた<sup>51</sup>。

このように中世盛期以降になると、入市式は聖職者・都市・君主側という3種類の書き手によって多様な史料<sup>52</sup>に記録されるようになり、式次第に関す

る情報は問題なく儀式を執り行えるように都市や教会のネットワーク<sup>53</sup>の中で共有された。

### 3. 中世後期の入市式の構成

前章で見てきたように、中世後期になる頃には入市式の基本的な構成は定まっていた。本章では入市式の構成要素をより詳細に考察するべく、G.J.シェンクが提示した入市式の理念型<sup>54</sup>を利用する。

シェンクは入市式を大きく3つの部分に分け、それらを更に6つの段階に分類している。ひとつめは第1段階の〈準備〉にあたり、迎え入れる側の都市は市内での準備だけでなく、国王宮廷や周辺都市など領域外での外交ルートを通じた情報収集に力を入れた。ふたつめは儀礼の部分で、境界で行われる第2段階〈出迎え *Occursio*〉、市門での第3段階〈入城 *Ingressus*〉、市内の特定のルートを巡る第4段階〈行列 *Processio*〉、市の筆頭教会で行われることが多い第5段階〈奉納 *Offertorium*〉までが含まれる。そして第6段階の君主及びお供の市内での〈宿泊と滞在〉が最後の部分に相当し、贈答品の進呈や狩猟や舞踏会などの娯楽はここで行われた<sup>55</sup>。

#### (1) 準備

神聖ローマ帝国は巡幸王権であり、君主は常に国内を巡っていた。当初は帝国各地の王宮に宿泊するのが常だったが、11世紀に入ると司教都市もその対象となった。以下、司教都市／領邦都市／帝国都市の場合について概説する。

司教都市に君主が訪れるようになったのは、帝国司教の義務である奉仕 *Servitium* が宮廷の生活費を賄ったからだと考えられている。司教ら聖界諸侯は、基本的には子孫を作ることができず己の権力を世襲させる家門を形成することが出来ない。そのため、たとえ君主との関係が悪化していたとしても、別の敵対勢力が皇帝に取り入っては困るため、君主の訪問を断ることは難しかった。中世後期に入っても司教都市は依然として君主の滞在地であり続けた<sup>56</sup>。

聖界諸侯に対して、この時期の世俗の諸侯は領邦内で既に自らの支配を確立していた。そのため領邦君主（世俗の諸侯）の支配下にある都市や城塞に君主（王／皇帝）がやって来るのは、招待された際や諸侯と王や皇帝の関係性が良好な時に限定される。招待された「客」である王／皇帝の滞在費が領邦側の負担<sup>57</sup>になることから、聖界諸侯の時とは異なり、関係が良くない状況で泊まりに行くということはそう多くはなかっただろう。

最後に帝国都市に関していえば、中世後期に入って経済力を大きく増したことで君主にとり最も魅力的な訪問先となった<sup>58</sup>。滞在の経費は一応は君主が支払うとされていたものの、価値がほとんどないものを担保として渡す、後年の帝国税とする、貸付金の返済とする、別の都市に帝国自由を与えて代わりに滞在した都市にかかった経費を肩代わりさせる、などの手段がとられて結局は都市の負担となった<sup>59</sup>。それにも拘わらず都市が王を迎え入れねばならなかったのは、帝国直属性には都市への無償招待権が付随していたからである。もっともこの権利は中世後期には名目上のものとなり、帝国都市によるもてなしは自発的なものとみなされ、特権授与や貨幣の鑄造権といった見返りが期待された<sup>60</sup>。

君主を恭しくもてなすためには多くの準備を必要とする。町の掃除はもちろん、壊れている門や塔は修理する必要がある。ローマ法や地方の慣習法の中には君主が通る大通りの広さについての規定があったので、必要な場合は道路の拡張工事も行われた<sup>61</sup>。君主や同行する取り巻きのための宿泊施設の確保に加え<sup>62</sup>、君主の訪れが減多にない都市は近隣都市に使節を派遣して、儀礼の形式や挨拶の方法、贈り物の金額などの具体的な事項を確認した<sup>63</sup>。加えて祝祭に付き物の騒動に対する安全対策を準備することも都市にとって必要だった。酔っ払った住民同士の喧嘩のほかにも、短気な君主や都市に敵対する君主がやってくる場合は市民といさかいを起こし、殴り合いに発展することもしばしばあったからである。市民は歩哨、夜警、防火、塔や門の警備<sup>64</sup>に割り当てられて武装した。特に危険が感じられるような際に

は、国王の騎馬隊<sup>65</sup>が通行できないようあらかじめ通りを鎖で封鎖する必要があったので、町のすみずみまで事前に計画が練られた。また、王を出迎える際の都市の人々の振舞い、歓呼の声の上げ方も指示しておく必要があった。聖職者集団や都市の支配者層以外でも、軍人、学生や若年層の市民、楽師の3つの集団が形成され、入市式におけるそれぞれの役割のため準備がされた<sup>66</sup>。

これら万全の準備を形にするためには、訪問のタイミングを正確に把握しておかねばならない。通例、君主の側でも都市に訪問の知らせを口頭もしくは文書で送ったようだが、都市側も能動的に情報収集に力を入れた。大都市は国王宮廷にいる知人、友人、後援者や自都市の外交使節を通じて君主の日程を可能な限り詳しく、かつ高い頻度で知るように努めた。小規模都市でも訪問の噂を聞きつけることくらいは出来たようである。また君主が接近する（図8）につれ、近隣の都市や友好都市、加えて君主の用事を担当している都市の子どもたちからも続々と情報がもたらされた<sup>67</sup>。

君主が近隣の都市まで来たことが明らかになると、市参事会<sup>68</sup>は市参事会員とその従者、場合によっては前市長やツンフトマイスター、商人、傭兵隊長なども国王のもとへと派遣<sup>69</sup>し挨拶の言葉を述べさせた。挨拶では都市に訪問の名誉が与えられるよう、国王に嘆願する形式が取られている。加えて、間近に迫った国王の訪問への喜びと都市の過剰なまでの恭順が表現された。国王に対する完全にへりくだった態度が挨拶としてふさわしい形式とみなされていたと考えられる。1471年のニュルンベルク市のフリードリヒ3世への挨拶文<sup>70</sup>と、1473年のバーゼル市の同皇帝に向けたそれとでは「君主の到着に対する都市の喜び」、「都市による君主の幸福を願う祈り」、「君主への都市の服従」の3要素が共通しており、他の全ての都市外交団の挨拶にもあてはまるものだったと考えられている<sup>71</sup>。都市から挨拶を受けると国王が返答するのだが、個人的に答えてはならず、必ず側近の助言を受けた後でなければならなかった。国王から市参事会へ礼が伝えられると、更

に市の外交団は王に訪問に際しての特別な要求がないか確認し、それが済んでようやく都市へと帰ることができた<sup>72</sup>。国王側もその後、専門知識を有する宮廷の伯、顧問官、軍務長官、官房長官や王に近い高位聖職者らを都市に派遣し、入市式の細部について打ち合わせをさせた<sup>73</sup>。

入市の数日前になると、市参事会の外交団が国王の要望を照会し、細かい点を詰めていく。儀礼の面では天蓋を掲げて行列形式で入市したいか、都市が手渡す都市城壁の鍵をすぐに返還することを承知しているか等、儀礼以外の面では君主やその側近、随員たちの宿泊施設や支給物品についても確認がとられた。国王宮廷の担当者も数日前から数週間前に都市に到着して準備にあたった<sup>74</sup>。

## (2) 出迎え *Occursio*

以上のようにして歓待の準備が済み、いよいよ国王が都市へとやってくると君主の到着を祝うために全市をあけて祝祭儀礼が執り行われた。都市のどの集団が、どんな場所で、どの儀式を執り行うのかということは基本的に共通している<sup>75</sup>。

〈出迎え〉は都市から少し離れた地点で行われる。君主が都市に近づいているという報を受け取ると、市参事会は王を出迎えるために代表団を派遣するのだが、その構成員は市で最も地位の高い層に属する者たちから成っていた。市長、前市長、建築親方、審判人、ツンフトマイスター、シュルトハイスなどの市参事会員、及び祝祭に相応しい豪華な晴れ着や馬を用意できる経済力を持つ都市貴族から成り、100～200人規模の騎乗した市民が集まった。大きな都市では更に傭兵隊長が率いる傭兵隊が加わることもあった<sup>76</sup>。これら俗人に対して聖職者は、帝国都市や自由都市では都市から離れた領域まで赴き出迎えることは減多にないとシェンクは指摘している<sup>77</sup>。王を迎える場所は市から離れた空き地や小村、マイルストーンの近くとされ、そこで最初の挨拶が行われる。最初の挨拶の場所までの距離はその時によって異なるが<sup>78</sup>、概して出迎え場所が都市から離れていればいるほど王への敬意が深いとみなさ

れた。〈出迎え〉の場所は都市の支配領域内にある必要があり、時には境界ぎりぎりのところまで迎えるに行くこともあった。マイルストーン以外にもキリストの十字架像や聖人像、橋など、目印となる地理的に特別な場所が選ばれることが多かった<sup>79</sup>。

〈出迎え〉の場所に国王一行が到着すると、代表団はみな馬から降りてひざまずき、その中で最も位の高いものがラテン語ではなくその地域の俗語で君主に歓迎の挨拶を述べるのだが、この段階ではまだ王は巡幸用の車から降りずに挨拶を受ける<sup>80</sup>。挨拶では君主の訪問に対する都市の喜びが明確に表現され、加えて君主に最高のもてなしを約束してその寵愛を乞い、更に君主の幸福や息災を祈る内容になっている。この〈出迎え〉の挨拶は都市外交団が君主を招待する際の挨拶によく似ていることが指摘されている<sup>81</sup>。公的訪問であるという性格上、王から都市への感謝の返答は直接王の口を通しては伝えられず宮廷長官*Hofmeister*を介して伝えられるのだが、同時に王はその後、その場にいる全ての参事会員に握手の手を差し伸べる<sup>82</sup>。なお王だけでなく随行する宮廷の貴族たちも都市から挨拶を受けた<sup>83</sup>。

ここまで帝国都市における国王の〈出迎え〉の様子を見てきたが、帝国都市以外の都市ではどうだったのだろうか。市参事会が都市を管理する帝国都市に対して、それ以外の都市の頂点は都市領主であり、それゆえ都市領主が君主を出迎える役割を担った。俗人の都市領主は貴族身分の自分の仲間や兄弟、司教らと従者を連れて王を出迎えに向かい、聖界諸侯の支配都市の場合は出迎えの方法は2種類あった。司教は俗人諸侯と同様に馬に乗って貴族を引き連れて出迎えるか、司教の祭服を着て聖職者たちで行列を組んで出迎えるかで、概して後者の方式のほうが好まれたと考えられている<sup>84</sup>。

## (3) 入城 *Ingressus*

都市の鍵の受け渡しに象徴される市門における〈入城〉は、君主にとって重要な意味を持ち、〈出迎え〉の時とは異なり都市から挨拶を受けるのは君主のみに限定された<sup>85</sup>。中でも戴冠後の最初の入市の



もつ重要性は大きく、都市の聖職者たちによる歓迎の儀式が市門の前で執り行われる点が特徴的である。この市門前での聖職者による儀式は2回目の訪問以降は省略されることも多く<sup>86</sup>、歓待する集団や人数、町の飾り付けも減らされ、贈答品や宿泊施設にかかる費用を削減するなど規模はかなり縮小されたらしい<sup>87</sup>。

君主の戴冠後の最初の訪問において、都市が慣例を踏まえて恭しく歓待するということは、君主を帝国元首であると同時に自分たちの都市の支配者であると法的に認めたことを意味した。帝国内を巡回することで支配権を確立する君主の巡幸<sup>88</sup>は、都市の力が増した中世後期になると中世盛期ほどにはその有効性を発揮しない。しかし中世後期であっても、帝国都市が代理人を通さず直接新王に誠実宣誓を行うことは珍しいものではなく、都市への最初の訪問時には市参事会やツunftなど市民の団体が君主に敬意を表明した。中世後期、王もしくは皇帝は都市にとってもはや名目上の支配者となっていたが、帝国都市においては君主の訪問が持つ法的・社会的・政治的意味合いがかりうじて保たれていたと考えられている<sup>89</sup>。

君主一行が都市に近づくと教会の鐘が鳴らされ、市門の前では大勢の様々な市民集団が王を待ち構えていた。市参事会の構成員や聖職者、武装した軍事関係者、楽器を奏でる楽師、そして少年たちは君主を歓迎するために帝国紋章の入った小旗を振って、冠を頭に出迎えた<sup>90</sup> (図10)。これら集団の中から最初に挨拶を行うのは聖職者である。彼らは儀式用の衣服を身にまとい、通常は大聖堂参事会、次いでそれ以外の教会、修道会の順に並んだ。司教と司教座聖堂参事会首席司祭や主任司祭、及び彼らを補佐する聖職者が袖なしの大外衣を、そのほかの聖職者は白い外衣を着用し、火の灯った蠟燭、乳香の入った吊り香炉、行列用十字架、聖遺物匣 (図11) や聖体顕示台 (図12) を捧げ持って進んだ。これに対し君主は、馬から降り、最も位の高い聖職者が差し出す十字架や都市を代表する聖遺物に恭しくお辞儀し接吻を行う<sup>91</sup>。君主の接吻ののち、聖職者とその弟子たち

が「ラウデス*Laudes*」と呼ばれる賛歌<sup>92</sup>や、「待ちに待って主が現れた*Advenisti desiderabilis*」<sup>93</sup>に代表される交唱を歌い<sup>94</sup>、〈入城〉における聖職者の儀式は終了した。

時には聖人の頭蓋骨の収められた聖遺物匣を跪く君主の頭に置いて、聖遺物のもつ聖なる力〈ウィルトゥス*virtus*〉<sup>95</sup>を君主に移す儀式を行うニュルンベルクのような例もある<sup>96</sup>。王が敬虔で謙虚な態度をとるのは都市との力関係によるものではなく、古代以来、敬神が君主の徳とみなされていたからである。「聖なる王」である君主には、聖職者の服装をまとして入市式に参加する権利が戴冠時に教皇から認められており、半神性・半聖職者性を帯びる皇帝はミサにおいて祭壇が置かれた空間に入り、大聖堂参事会員とともにいる権利も与えられた<sup>97</sup>。

儀式後、君主が再び騎乗すると都市の代表団が歩み寄り、市長が再び〈出迎え〉の際と同内容の挨拶の言葉を、しかしここでは君主のみに述べるとともに、市門の鍵を手渡す<sup>98</sup> (図13-1・2)。聖職者による挨拶と同様に、鍵の委譲も〈入城〉における重要な要素のひとつであり、その原型は『マタイによる福音書』16-19のイエスによる聖ペテロへの天国の鍵の授与と考えられている<sup>99</sup>。市門の鍵は都市防衛の自由裁量権の象徴であり、鍵を渡すことは君主を正当な都市領主として承認したことを示していた<sup>100</sup>。市長は王に恭しい言葉とともに鍵を差し出しはするが、都市の支配権を象徴する鍵を王が長く持ち続けられるわけではなく、その場で都市に返却することが求められた<sup>101</sup>。鍵の委譲も即位後最初の入市のときにしか行われない。また都市の鍵が意味する内容からも明らかのように、鍵の移譲が行われるのは帝国都市や君主の支配権が及ぶ都市に限定され、領邦君主の都市においては全く見られない<sup>102</sup>。

鍵が都市に返還されると、都市は自らの手で市門を開き君主を迎え入れる。このとき王に付き従うことの出来た者、つまり王の馬や車、マントなどに取りすがることが出来た者や、更には群がる大衆から王を守るために従者が持っていた杖にすがることが出来た者は罪を許されて町に入る許可を得られると

いう慣行があった。これは神聖なるものや場所、人との接触が自由と比護をもたらすという古代からの観念に基づいている。カエサル時代にはまだ接触による恩赦についての記載はないが、入市の際の恩赦は祝祭において一般的に行われていた。またゲルマン人の慣行でも、戴冠した王は即位後最初の巡幸で自らに接触した者に恩赦を与えることが出来ていた<sup>103</sup>。古典古代由来の遺産とゲルマン人の慣習が結びつき、中世に引き継がれたと考えられている<sup>104</sup>。君主による恩赦の慣行は、中世後期から近世初期のスイスとドイツの全領域で広まっており、ザクセンシュピーゲル・ラント法（3・60・3）とシュヴァーベンシュピーゲル・ラント法（2・134）にも該当箇所が確認される<sup>105</sup>。初めは君主だけが恩赦を与えることができたが、中世末期から近世にかけて領邦権力の強化が進むにつれ、聖俗諸侯も恩赦の慣行を用いるようになった。また、都市にとっては罪人を内に入れることは決して歓迎できる事態ではなく、恩赦の対象を浮浪などの軽度の違反行為にとどめさせるか、重罪人の都市滞在は君主がいる間に限るとし、君主が都市を去るや否や再び追放することもあった。時代を経るにつれ君主との接触という君主の超自然的な力を根拠とするだけでは不十分だと考えられるようになり、15世紀になると文書による保証が求められ、接触のみで恩赦を与えられるドイツ王／ローマ皇帝はいなくなった<sup>106</sup>。

王が都市に〈入城〉する際は一般的に、都市の最上層の市民の手によって王の頭上に天蓋が掲げられる（図14）。例外的に、1417年10月にルツェルンに〈入城〉した国王ジギスムントは、聖体を捧げ持つ聖レオデガー司教座教会主席司祭に天蓋を譲って司祭の後ろを歩んだ例があり（図15）、マクシミリアン1世も自らの謙虚さを演出することを目的として、最初から天蓋を使用しないことが多かった<sup>107</sup>。

王の頭上に天蓋を掲げる慣行は、古代のエジプトやバビロニア、アッシリアに遡るとされ、太陽や星の飾りが付いた天蓋は天の象徴である。アレクサンドロス大王以降、ヘレニズムの地でも金色や紫の天蓋が用いられ、古代末期や東ローマ帝国になると天

蓋は皇帝の印となり、キリスト教を公認したコンスタンティヌス帝の時代には教会の祭壇に対しても掲げられていたらしい。キリスト教の影響を受け、天蓋にはイエスの〈イェルサレム入城〉やソロモンの王座のイメージも反映されているとされるが、いずれにしても天蓋の下にあるものは聖なる、突出した存在だと示す機能があった。西欧の中世初期には君主を題材とした絵画に天蓋が確認されるが、当時の絵は古典古代やビザンツの影響を強く受けているため、必ずしも天蓋が使用された証拠にはならないだろう。12世紀以降はドイツやイギリス、スペインなどでも王の戴冠行列の際に持ち運びの出来る天蓋を使用した例が多くあり、これは教皇が王に天蓋の使用を許可したからだと考えられている<sup>108</sup>。12世紀末からは特別な時に限定されるが高位の聖界諸侯も威厳を示すために布製の天蓋を使うようになり、13世紀からは宗教行列の際にも聖体や聖遺物に対して用いられるようになった。13世紀後半は戴冠行列だけでなく君主が入市する時に使われたが、行列時にも使用されたかは不明である。入市の行列で使用が確認される最初の例は、国王ハインリヒ7世の1311年10月21日のジェノヴァ入市とされ、君主に対する天蓋使用の慣行が元来イタリアの伝統だったからだと考えられている。この慣行がアルプス以北に定着するのは1360年代頃以降とされる<sup>109</sup>。

〈入城〉後、君主は常に天蓋の下を進んだ。天蓋の素材は君主に相応しい高価な絹や金襴で作られ、通常は帝国や王領地の紋章、加えて戴冠式では選帝侯の紋章も刺繍や彩色で付けられていた。天蓋を支える棒は金色に鍍金されていたとされる<sup>110</sup>。天蓋は君主のシンボルとはいえ、使用後は君主に所有権はなかった。それどころか入市式で君主の使用したものが他の人の所有になる習慣が存在し、これを後世の研究者は「君主に対する略奪権」<sup>111</sup>と呼んでいる。天蓋もしくは天蓋に使用された布地を得る権利は帝国世襲財務官*Reichserbkämmerer*にあり、世襲財務官は時には王が使ったベッドや寝具一式さえも要求することができた。これらの品々は都市参事会を通じて帝国世襲財務官に贈られる<sup>112</sup>。天蓋やその布地



の略奪の慣行は帝国都市では規模の大小を問わずどこであっても、加えて一部の自由都市でも行われていた。しかし15世紀になると帝国世襲財務官は天蓋を毎回手元に残すのではなく、都市参事会に布の価値に見合う金額を用意してもらい、金銭と引き換えに都市に残していくことを好むようになった。都市側も手の込んだ豪勢な布地を手放すことは望まず、天蓋の布地を使って市の教会で司祭のためのミサ用祭服に仕立てた例もある<sup>113</sup>。

国王選挙や戴冠と深く結びついた地<sup>114</sup>では、王の随員だけでなく都市も王から略奪を行い、マントや上着などの衣類に加えて乗用馬と馬具類まで奪われることもあった。しかし馬を奪われてしまうと行列を続けることができないので、馬具類も含めて対価を払って請け出さねばならない。例えば1442年のフリードリヒ3世の国王戴冠に伴うアーヘンへの入市では、市門の前で門番や塔の番人に、アーヘン大聖堂前では都市の代官であるユーリッヒ大公に、宿泊先到着後はケルン大司教の世襲マルシャルに略奪権が保障されていたが、3回もの略奪が実際に行われたかは疑問でせいぜい1、2回だったのではないかと考えられている<sup>115</sup>。

略奪権の根拠は金印勅書の第29条と第30条が考えられる。これら条項では、帝国の宮廷長官の国王選挙及び戴冠後の宮廷会議における取り分、封土を授与される帝国諸侯が役人である帝国の世襲官職<sup>116</sup>保有者やその空席時には次席や次々席に支払う現金について、そして封土受領者の乗用馬を帝国首席軍務長官に渡すことが定められている。これらの現金や馬、椅子や臨時会議場の建設に用いられた木材は、名誉職である彼らにとっての報酬と考えられる<sup>117</sup>。金印勅書にはこれら条項と都市による君主への誠実宣誓や入市式がどのような関係にあるかは記載していない。しかし実際に入市式では、帝国官職保有者は金印勅書を引き合いに略奪権を、帝国都市も金印勅書を拡大解釈して手数料として金銭の支払いを主張した<sup>118</sup>。

「君主に対する略奪権」は金印勅書に加え、他にも4つの慣行の影響を受けて形成されたと考えられ

ている。うち最も古い慣行は、古代から中世盛期における高位聖職者の死後の略奪で、それ以外にローマ教皇選出の際の略奪とヴェネツィア総督選出とその死後の略奪、そして教皇庁における訪問者の馬とマントの略奪が挙げられる。古代末期には亡くなった高位聖職者の財産を奪う習慣があり、中世盛期に入ると教皇の邸宅も死後略奪にあったうえ、時には亡骸の身に付けている衣服や遺骸を覆う布さえも奪い去られた。先の有力者の財産や持ち物が強奪されるというこの事象は、研究者の解釈も分かれている。国王高権により高位聖職者の遺産を没収することができるシュポーリエンレヒト*Spolienrecht*<sup>119</sup>に関連付け、奪った財産は教会の共有財産となったという説明や、聖なる力〈ウィルトゥス〉<sup>120</sup>を宿した遺骸から聖性が移された衣類を収奪したとする説、文化人類学者A.ヴァン・ジェネップが提唱する通過儀礼の一種とする説などが提出されている。

2つ目と3つ目にあたる教皇やヴェネツィア総督選出後の略奪も、代替わりにおける通過儀礼の変形として説明される。新たな教皇が決定すると教皇に選出された枢機卿の邸宅やコンクラーベの会場はローマ市民から強奪を受けた。また15世紀以降は新教皇の行列に際し、教皇の騎乗馬と鞍の下に敷かれる敷物、教皇の頭上に掲げられる天蓋もローマ市民の略奪の対象となった。ヴェネツィア総督の場合、亡くなった総督の邸宅と、サン・マルコ寺院で選出されたばかりの新総督の衣服、時には新総督の邸宅も略奪を受けた。亡くなった前任者だけでなく新任者まで略奪にあうのは、これまでの存在から新たに絶対者へと生まれ変わると考えられたからとされる。教皇はキリスト教界での最高権威者であり、ヴェネツィア総督も支配領域においては絶対的な権力を象徴する。略奪の儀式を通して彼らはいわば一回死に、新たに絶対的存在へと移行するのである<sup>121</sup>。

4つ目の慣行はより現実的な理由だった。ローマを訪れる司教や修道院長、そして戴冠のために訪れる王は騎乗して町に入るため、その馬を引く係の随行者*Addextrator*は儀式の後に馬を、彼らの着替えを手伝う従者*Kubikularius*はマントをその労働の対価

としてもらう権利があった。教皇庁の役人や使用人にはまだきちんとした棒給を支給されておらず現物で埋め合わせを行っていた時代の慣行が残ったのだと考えられている<sup>122</sup>。

#### (4) 行列 *Processio*

都市に入ると君主の一行は、市参事会員や聖職者ととともに〈行列〉を組んで行進する。これはキリストの〈イエルサレム入城〉を記念して行われる典礼、枝の主日の行列<sup>123</sup>が起源<sup>124</sup>であるといわれている<sup>125</sup>。

〈行列〉の中央に位置する国王一行の並び順は基本、金印勅書第22条「選定侯の行進順序について、ならびに誰によって権標が護持されるのか<sup>126</sup>*De ordine processionis principum electorum, et per quos insignia deportentur*」の章に従い、下記の形をとる（文末概念図<sup>127</sup>参照）。先頭にトリーア大司教、その後列・中央に帝国剣（図16）を掲げ持つ帝国首席軍務長官のザクセン大公、右側に十字架つき帝国宝珠（図17）を持つ帝国首席大膳職長官のライン宮中伯、左側に王笏を持つ帝国主席財務官のブランデンブルク辺境伯がくる。君主はザクセン大公の後方に位置し、皇帝の右斜め後ろにはマインツ大司教、左斜め後ろにはケルン大司教が続く。皇帝の右側のほうが名誉ある位置とされていたため、ケルン大司教区ではマインツ大司教とケルン大司教の位置は逆になる。最後尾、皇帝の後ろにボヘミア王が続いた<sup>128</sup>。

選帝侯は欠席することもあったため、帝国権標である帝国剣と帝国宝珠、王笏<sup>129</sup>が揃わないこともある。金印勅書の第27条と第30条には首席官職保有者が欠席した場合の規定もあり、欠席時の代理にはふさわしい宮廷官職の持主、もしくは少なくとも欠席した首席官職保有者の支配領域にある侯が出席するよう求められ<sup>130</sup>、欠席者が担当する帝国権標は出席している残りの選帝侯のうち一番地位の高いものが代わりに持って行進した<sup>131</sup>。これら3つの宝物のうち帝国剣は特に重要であり、中世初期から中期の時点では帝国剣を捧げ持つことが君主への従属を意味すると考えられた。王権が相対的に弱くなった中世後期になると、そこまでの意味はもたず、しかしそ

れでも依然非常に重要で名誉ある役目ではあった<sup>132</sup>。

国王一行だけでなく市の歓待団も自分たちの標章物を持って〈行列〉に参加していた。例えば1442年6月のフリードリヒ3世のアーヘン戴冠後のケルン訪問<sup>133</sup>では、〈行列〉を先導する2人のケルン市長の後ろについた従者2名が市長の職権の象徴である杖を掲げ、また最後尾近くにいたケルンの代官と参審裁判長は、それぞれの職権の標識である棹状の棒と裁判官の杖を掲げていた記録が残る<sup>134</sup>。

金印勅書第22条を基本とする国王一行の並び順は実際は君主との関係性や政治状況に左右されることもあり、重要な位置である君主の傍らを主催者である開催地の領主に割り振ることもあった<sup>135</sup>。〈行列〉における君主との空間的距離を見ることでその時の君主との関係、更にはその集団内における参加者の順位を推測することができる<sup>136</sup>。政治状況が〈行列〉の順序に影響を与えたことが良く分かる例として、シェンクは1486年に行われたマクシミリアン1世のアーヘンでの国王戴冠行列を挙げている。このとき、七選帝侯のうちブランデンブルク辺境伯とボヘミア王が欠席<sup>137</sup>しているのだが、代わりに参加したのは金印勅書第27条で定められた帝国世襲献酌長官*Reichserbschenke*ではなく、皇帝フリードリヒ3世<sup>138</sup>の甥であるバーデン辺境伯アルブレヒトと、政治的に皇帝と強い結びつきを持つヘッセン方伯ヴィルヘルムだった。他の参列者もアルブレヒトの兄バーデン辺境伯クリストフ1世や、やはりマクシミリアンの従兄にあたるザクセン大公エルンストとアルブレヒト勇敢公、ハンガリーのエステルゴム大司教で皇帝の有力助言者兼財政援助者のヨハン・ベッケンシュラーガーなど、皇帝に非常に近い関係者で固められており<sup>139</sup>、自由な変更が行われにくい教会典礼の式次第に比べて、市内の〈行列〉はその時々状況が反映されやすいものだったように思われる。

都市への訪問に際して、君主は選帝侯や大貴族だけではなく、家族や側近、それ以外の貴族、布告官や従紋章官などの宮廷役人、騎士、国王専属の楽師（図19）、そして自分たちの身の回りの世話をする従

者らも多く引き連れて来るため、それら様々な集団も参列し、〈行列〉は非常に賑やかなものになった。また準備の段階で計画されたように、市中は入市のために特別な装飾であらゆる場所が飾りつけられた。市門や通りは織物や絨毯で飾られ、帝国や都市の紋章が入ったのぼりや旗、三角旗が塔や市壁の上ではためいた。更に都市の住人も手に手に小旗を握って行列に押し寄せ、旗を振って一行を歓迎した<sup>140</sup>。ごく珍しい例だが、通りに芝生や牧草などの緑を敷いたり、塔を枝木や若木、小さな樹木で飾り付けることもあった。植物を使った街の装飾は1414年の都市パーゼルへの入市と1442年の都市フリブールへの入市の2例が確認されるのみである。この事象は当時君主が行っていた戦争に対して都市が距離を置くことの表明（1414年）や、「君主＝平和をもたらす存在」として歓迎する（1442年）意味があったと解釈され、イエスの〈イェルサレム入城〉において月桂樹や棕櫚、オリーブの枝が平和の隠喩とされたことに倣った方法だと考えられている<sup>141</sup>。アルプス以北の地域では木造建築が多かったこともあり、祝いのかがり火が灯されることはそう多くはなかったが、町にある全ての鐘が打ち鳴らされ、市の正装を身に付けた都市の楽師たちも市門の塔に集い市の紋章を取りつけた楽器を演奏するなど晴れがましい空間が演出された<sup>142</sup>。

### （5）奉納 *Offertorium*

〈奉納〉は、教会が受け持つ歓待のなかでも最大の山場であり、入市式全体においても核となる部分である。君主は都市を訪問した日に、または到着が夜中になるなど何らかの事情があるときは翌日に都市の筆頭教会を訪れ、儀典書の規定<sup>143</sup>に従って典礼を受けた<sup>144</sup>。

君主は都市の聖職者に先導されて市内の定められたルートを通り、交唱「見よ、わが使者を遣わすのを *Ecce mitto...*」<sup>145</sup>が唱えられるなか、教会へと進んだ。この交唱は教会の正面の入り口に到着するまで歌われ続ける。都市の最高位の聖職者が〈入城〉の際に市門前で君主を出迎えなかった場合は、教会正

面玄関の前で君主の来訪を待つ。君主は儀典書の規定に従い、濯水器によって聖水を注がれ香炉から撒香されてから教会に入る。その後、廷臣や都市の指導層に加え、ツンフトの構成員といった市民も蠟燭を手にして入場し、ミサに参加した。席次は聖職者と都市指導層が話し合っただけと考えられている<sup>146</sup>。

教会の中ではオルガンのほか、聖歌隊の歌う「テ・デウム *Te Deum*」<sup>147</sup>が響いていた。君主は家臣と都市指導層を従えて身廊を歩み、それから単独で司祭とミサの侍者の待つ内陣に進む。内陣の祭壇近くには高価な織物をかけられた君主専用の木製祈祷台が置かれた。君主は儀典書の規定に従い、祭壇の方向を向いて祈祷台に恭しく跪いて祈り（図20）、聖職者が集祷文を読み聞かせる。君主はまた自身が王に相応しい存在であることを示すため、教会や都市の守護聖人に奉納を行い、儀典書の規定に則って手ずから奉納金を中央祭壇に捧げた。君主の到着を祝う典礼は、比較的短くまとめられるのが常だが、到着の翌日以降に行われる場合は当日に開催される場合に比べ拡大した形式でミサが営まれた<sup>148</sup>。この後、聖職者による説教か式辞があり教会における歓待儀礼は幕を閉じる。王は祝福の言葉を受けるとオルガンと聖歌が響くなか、再度、家臣と都市の指導層に付き従われて身廊を抜け、教会の外に出て儀式は終了する<sup>149</sup>。

以上が一般的な式次第だが、特別な機会には併せて特別な典礼が追加されることもあった。例えばクリスマスには王冠を頂き帝国剣を携えた状態の王が『ルカによる福音書』2-1と「聖務日課」から採られた第7読誦 *lectio septima*<sup>150</sup>を朝課で歌うのだが、これは王の聖性よりも、教会に対して自身がアウグストゥスの正当な継承者であることを強調する政治的な意味合いの強いものとされる<sup>151</sup>。一方で教会側も儀式を通じて君主に権威の儼然さを知らしめようと、15世紀の一時期、ニュルンベルクにおける即位後最初の入市式で亜麻布を使う特別な儀礼が行われたことが確認されている<sup>152</sup>。

筆頭教会で〈奉納〉が行われた後は、教会に関連



する儀式は行われず、以降の滞在期間には世俗の催しが行われた<sup>153</sup>。

#### (6) 宿泊と滞在

教会を出た君主は再度天蓋の下に入り、宿場に移動する<sup>154</sup>。ただし家族や家臣、そして100人以上に上る騎士とその馬を連れる君主一行の規模は大きく、市内に収まりきらない場合もあるため家臣たちは周辺のいくつかの都市や村に分かれて泊まることもあった。君主の家族や宮廷貴族たちは君主の滞在先の隣に宿泊できるよう、できる限り配慮されたようである。君主の宿泊先は司教や聖堂参事会員などの邸宅、ヨハネ騎士団などの騎士修道会の館、または富裕な市民の屋敷が多く、都市の中でも最も豪華な館が選ばれるが、君主一行の快適な滞在のため、更に小規模の改築が加えられることもあった。君主に相応しい水準の家財道具や寝具がその家になければ、ふさわしいものを所持している市民が貸出しをした。君主の滞在中は、屋敷の門の上に王の宿泊先であることがわかるよう帝国の紋章が燦然と掲げられた。また君主の随行員たちの滞在先の門にも小さな鷲の紋章が飾られ、その下に宿泊者の名前が記載された。君主が宿泊するための準備にかかった経費は家主に対して市参事会が支払いを行うのだが、都市の財政事情から、都市に住むユダヤ人が帝国君主の訪問の度に特別税を課されることもあった<sup>155</sup>。迫害を受けていた中世のユダヤ人は1236年以来、金銭と引き換えに王室所属の奴隷*Kammerknechte*として国王の保護下にあり<sup>156</sup>、彼らの税金は王の泊まる部屋のベッドや寝具類、台所用品、国王官房が使用する羊皮紙などの準備にあてられた<sup>157</sup>。それとは別に、宿泊先の主人は市参事会が決定した宿泊料や厩の使用料を宮廷に請求することができたが、君主が支払わないで去ってしまうこともあり、そういったケースでは市参事会がその費用も支払わざるを得なかった<sup>158</sup>。

君主がわざわざ都市を訪問するのであるから、当然都市は君主に贈り物を贈呈することが求められる<sup>159</sup>。贈り物は大きく2種類に分けられ、(1) 飲食

物など (2) 表敬の贈答品である。(1)の飲食物は君主一行が宿に到着してから日が暮れるまでの間に、市長や市参事会の構成員が宿泊先を訪問して贈り、対して (2)の贈答品は腐るものではないことから、君主たちも長旅や多くの儀式で疲れているので渡すのは翌日以降となるが多かった<sup>160</sup>。

(1)の飲食物等の現物供与は巡行王権にとって必要不可欠なものであり、君主一行には大いに歓迎された。通常、樽に入ったワインやオート麦、魚、牛肉、羊肉、鳥獣の肉が何台もの荷車に積まれて贈られる。特に盛大な例では、フリードリヒ3世がアーヘンでの国王戴冠に赴く途中で立ち寄った1442年のケルン入市が有名である。大きく新鮮なチョウザメ1匹、鮭8匹、鯉25匹で、これらは王が寝室の窓から覗いて見ることができるよう庭に大きな樽に入れておかれた。他にも都市の紋章入りワイン樽を1樽ずつ積んだ荷車12台、続いてオート麦を積んだ都市の紋章を付けた荷車10台、列の最後に額に都市の紋章をつけた雄牛10頭が贈られた<sup>161</sup>。またフリードリヒ3世が1473年に財政的に豊かなメッツ市を訪問した際には、雄牛30頭、雄羊300頭、麦800フィアテル<sup>162</sup>、ワイン30樽をフリードリヒ3世に、そしてその半量が息子マクシミリアン1世に贈られている<sup>163</sup>。

到着の翌日、早朝ミサの後に市長や市参事会の代表らは再度君主の宿泊先を訪れ、(2)の表敬の贈り物を贈る。代表的なものは金銭で、巡行を財政面で支えてくれることから君主からも非常に喜ばれたが<sup>164</sup>、貨幣をそのまま剥き出して贈るわけではない。都市の金細工師がエナメルで都市の紋章を描き鍍金を施した豪華な銀製ゴブレットを制作し、その中に金貨を詰めて贈呈した(図21)。この他にも様々な技巧を凝らして作られた銀食器類、ダチョウの卵殻といった異国の珍しい産物を素材に制作されたゴブレットなどの贈り物に加えて、その土地の特産物も非常に喜ばれた。例えば亜麻布の産地のザンクト・ガレン市は2枚の美しい亜麻布をフリードリヒ3世に贈り、織物産業で有名なフリブール市も王の随行員の中にいたムーア人女性に16枚のスカートを贈っている。このような贈り物が行われるようになった

のは15世紀以降であり、都市の手工業・産業が発展して富裕な市民が増えた時期とも一致する<sup>165</sup>。しかし、いくら都市の力が増していた時期とはいえ、むしろ都市の力が増したからこそ、求められるままに貢物を差し出すだけではなくなっていた。贈り物の多寡からはその入市の意義に加え、君主と都市との関係を伺うこともできる。

金銭の贈呈に関していえば都市が自由意思で行っていたという解釈<sup>166</sup>がある一方、君主が帝国都市や司教都市に訪問したときのみ贈り物があり、領邦君主が支配する都市や城館を訪れた場合には表敬の贈り物がほとんど無かったことから、ある種の税とみなす説もある<sup>167</sup>。また本章の第3節〈入城*Ingressus*〉において、君主の即位後最初の入市の意義に関して触れたが、君主に贈られる金額は最初の入市に加えて戴冠や選挙、帝国会議、または都市への侵入者を君主に撃退してもらうような際<sup>168</sup>に高額となる傾向があり、1000から3000グルデン<sup>169</sup>ほどが支払われたが、豊かな都市でもない限りそれ以外の機会では100から数100グルデンにとどまった<sup>170</sup>。金銭以外の贈り物に関しても同様で、重要な機会以外では少なくなる傾向にある。更に15世紀後半には、諸侯による帝国都市への攻撃を皇帝フリードリヒ3世が黙認したことが原因で帝国は都市からの信頼を失い、フリードリヒが1485年9月にストラスブル<sup>171</sup>を訪れた際には金銭は一切支払われなかった<sup>172</sup>。この頃には皇帝の巡行は、都市から都市へと渡り歩いて都市に乞食のように金をせびる帝国の威信を傷つける行為だと考えられるようになり、都市側は自分たち帝国都市こそが帝国そのものだと考えるようになっていた<sup>173</sup>。

滞在中の君主へのもてなしは快適な宿泊と贈り物だけにとどまらない。都市の有力者は食事の提供(図22)はもちろん、舞踏会<sup>174</sup>や狩り(図23)<sup>175</sup>、中世後期のアルプス以北ではそう多くはなかった<sup>176</sup>が馬上試合<sup>177</sup>や活人画などの娯楽も一行を楽しませた。曲芸師や道化師、吟遊詩人らによる余興も行われ、噴水からは赤白のワインが溢れた<sup>178</sup>。君主はこの他にも有名な聖遺物を見に行ったり、手工業工房の見

学、大砲について話を聞きに行くなど、することは多かった<sup>179</sup>。

#### 4. おわりに

入市式の本質は神事から祭礼、祭礼から祝祭へと古代・中世・ルネサンスの間に変質を遂げたが、民衆の目に映る中世の君主の背後には、依然として古代ギリシアやローマの神々、ローマの初代皇帝アウグストゥス、イェルサレムに入城するキリスト、民の病を癒す聖なる王、加えて同様に儀礼を伴って入市した歴代の王・皇帝たちの神々しく荘厳な姿が想起されたに違いない。むしろ、君主はそれらと同一の存在として祭礼に登場したともいえる。

しかし時代が流れ、君主と帝国都市との関係が変化していくにつれ、王の魔力も王から民へと一方的に照射されるものではなくなる。都市の力は増し、また王も自ら都市の守護者としての役割を手放したため、君主はもはや民衆にとって諸手を挙げて歓迎すべき存在ではなく<sup>180</sup>、更に15世紀からハプスブルク家と対立を繰り返していたスイス諸都市においては、帝国の一員であることを示す君主の入市自体が行われなくなった<sup>181</sup>。依然として君主の訪問があった都市でも、16世紀に入り宗教改革の訪れを受けて都市の入市式は変容した。入市における教会の要素は失われ、代わりにイタリアのルネサンスの影響を受けて、豪華絢爛な世俗の権威を誇示するものとなった。中世後期にはまだ珍しかった劇が市内のあちこちで催されるようになり、祝砲がとどろき、凱旋門は華やかに飾られた。こうして神聖な要素が重視されていた入市式は瞬く間に祝祭としての、そして政治的演出としての入市式へと変貌したのである<sup>182</sup>。

とはいえ、キリスト教や古代の要素が完全に消失したわけではないことは、現在も行われる教会典礼を伴う戴冠入市式の存在や、冒頭で触れた演出家の意図的な演出により中世の凱旋行進と結びつけられた近代の祝賀行列の例からも明らかだろう。世俗の権威は古代や中世の影から完全に解き放たれたわけ

ではなく、取り込むことでより一層自らの権威を強化したといえる。行列に臨む君主の内に潜む古代・中世の重層的な残像は、近世から近代、近代から現代へと連綿と受け継がれ、今日も息づいている。

## 附記

本稿は執筆者の卒業論文『中世後期におけるドイツ国王／神聖ローマ帝国皇帝の歓待礼－スイスを中心として－』（東京大学、2007年）の第1章、および第2章を改稿したものである。

## 挿図出典

- 図1 : Albrecht Dürer, Der Große Triumphwagen, Inv. 15423, Feder in Braun, aquarelliert, 1518. In: Sammlungen Online [https://sammlungenonline.albertina.at/?query=search=/record/objectnumbersearch=\[15423\]&showtype=record](https://sammlungenonline.albertina.at/?query=search=/record/objectnumbersearch=[15423]&showtype=record) (access 2023.6.2)
- 図2-1 : Inv. B.11477 © The Trustees of the British Museum [https://www.britishmuseum.org/collection/object/C\\_B-11477](https://www.britishmuseum.org/collection/object/C_B-11477)
- 図2-2 : gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France, département Monnaies, médailles et antiques, Beistegui.233
- 図3 : Metropolitan Museum of Art, Gift of Henry Walters, 1917, Inv.17.37.241 <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/342714>
- 図4 : Smithsonian American Art Museum, Gift of John Gellatly, 1929.8.230 <https://americanart.si.edu/artwork/holy-water-sprinkler-aspergillum-29669>
- 図5 : The Metropolitan Museum of Art, Gift of J. Pierpont Morgan, 1917, Inv.17.190.1406 <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/464023>
- 図6-1 : Kunstmuseum Basel, Kupferstichkabinett, Amerbach-Kabinett 1662, Inv. Aus K.7.103 <https://sammlungenonline.kunstmuseumbasel.ch/eMP/eMuseumPlus?service=ExternalInterface&module=collection&objectId=24527&viewType=detailView>
- 図6-2 : The Metropolitan Museum of Art, Gift of J. Pierpont Morgan, 1917, Inv.17.190.360 <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/464340>
- 図7 : The Metropolitan Museum of Art, Robert Lehman Collection, 1975, Inv.1975.1.1383 <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/460446>
- 図8 : Staatliche Museen zu Berlin, Kupferstichkabinett / Jörg

P. Anders

<https://id.smb.museum/object/1053892/kaiser-maximilian-im-reisekleid-zu-pferde>

図9 : Bern, Burgerbibliothek, Mss.h.h.I.1: Diebold Schilling, *Amtliche Berner Chronik*, Bd. 1

<http://www.e-codices.ch/de/bbb/Mss-hh-I0001/327>

図10 : Bern, Burgerbibliothek, Mss.h.h.I.16: Diebold Schilling, *Spiezer Chronik*

<http://www.e-codices.ch/de/bbb/Mss-hh-I0016/601>

図11 : ©Historisches Museum Basel, Peter Portner. Inv. 1882. 85.

<https://www.hmb.ch/museen/sammlungsobjekte/einzelansicht/s/eucharistisches-kaestchen-aus-dem-basler-muensterschatz/>

図12 : ©Historisches Museum Basel, Peter Portner. Inv. 1933. 159.

<https://www.hmb.ch/museen/sammlungsobjekte/einzelansicht/s/apostel-monstranz-aus-dem-basler-muensterschatz/>

図13-1 : Luzern, Korporation Luzern, S 23 fol.: *Eidgenössische Chronik des Luzerners Diebold Schilling (Luzerner Schilling)* <http://www.e-codices.ch/de/kol/S0023-2/112>

図13-2 : Luzern, Korporation Luzern, S 23 fol.: *Eidgenössische Chronik des Luzerners Diebold Schilling (Luzerner Schilling)* <http://www.e-codices.ch/de/kol/S0023-2/110>

図14 : Bern, Burgerbibliothek, Mss.h.h.I.1: Diebold Schilling, *Amtliche Berner Chronik*, Bd. 1

<http://www.e-codices.ch/de/bbb/Mss-hh-I0001/324>

図15 : Luzern, Korporation Luzern, S 23 fol.: *Eidgenössische Chronik des Luzerners Diebold Schilling (Luzerner Schilling)* <http://www.e-codices.ch/de/kol/S0023-2/108>

図16 : Kunsthistorisches Museum Wien, Weltliche Schatzkammer, Schatzkammer, WS XIII 17

<https://www.khm.at/en/objectdb/detail/100441/>

図17 : Kunsthistorisches Museum Wien, Weltliche Schatzkammer, Schatzkammer, WS XIII 2

<https://www.khm.at/en/objectdb/detail/100444/>

図18-1 : Kunsthistorisches Museum Wien, Weltliche Schatzkammer, Schatzkammer, WS XIII 1

<https://www.khm.at/en/objectdb/detail/100430/>

図18-2 : Albrecht Dürer, Karl der Große, Inv. 3125, Feder in Schwarzblau, aquarelliert, 1510. In: Sammlungen Online [https://sammlungenonline.albertina.at/?query=search=/record/objectnumbersearch=\[3125\]&showtype=record](https://sammlungenonline.albertina.at/?query=search=/record/objectnumbersearch=[3125]&showtype=record) (access 2023. 6.2)

図19 : Hans Schäufelin, Der Triumphzug Kaiser Karls V.: Musiker, Standartenträger und Reiter, Inv. D/1/22/77, Holzschnitt, Ende 15. - Mitte 16. Jahrhundert. In: Sammlungen Online <https://sammlungenonline.albertina.at/?query=search>



= /record/objectnumbersearch = [D/I/22/77] &showtype = record (access 2023.6.2)

図20 : The Metropolitan Museum of Art, Gift of Felix M. Warburg, 1920, Inv. 20.64.6

<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/747302>

図21 : Albrecht Altdorfer und Altdorfer-Werkstatt, Triumphzug Kaiser Maximilians I.: Der Gebrauchsschatz, Inv.25232, Feder in Dunkelbraun, Pinsel, Aquarell und Deckfarbe, Goldhöhung auf Pergament, um 1512 - 1515. In: Sammlungen Online [https://sammlungenonline.albertina.at/?query=search=/record/objectnumbersearch=\[25231\]&showtype=record](https://sammlungenonline.albertina.at/?query=search=/record/objectnumbersearch=[25231]&showtype=record)

図22 : Luzern, Korporation Luzern, S 23 fol.: *Eidgenössische Chronik des Luzerners Diebold Schilling (Luzerner Schilling)* <https://www.e-codices.ch/de/kol/S0023-2/77>

図23 : Inv. 1911.0708.92 © The Trustees of the British Museum [https://www.britishmuseum.org/collection/object/P\\_1911-0708-9](https://www.britishmuseum.org/collection/object/P_1911-0708-9)

(むらまつ・あや 芸術学／西洋美術史)  
(2024年11月4日 受理)

## 註

- 菅原未宇「エリザベス一世の入市式における都市支配層の戦略」『比較都市史研究』20-2、2001年、25頁。入市式の先行研究は同論文の註に詳しい。
- Roy Strong, *Art and Power, Renaissance Festivals, 1450-1650*, Berkely, 1984, pp.50, 97 [星和彦訳『ルネサンスの祝祭(上・下)』平凡社、1987年、上114、上211-212頁];菅原、25、33、36頁。
- 『ルネサンスの祝祭(上)』62-63頁;赤松加寿江「祝祭演出家ヴァザーリ」野口昌夫編著『ルネサンスの演出家ヴァザーリ』第5章、白水社、2011年、271-346頁。
- 京谷啓徳『凱旋門と活人画の風俗史 儚きスペクタクルの力』講談社、2017年、第1章及び第2章。
- 岩谷秋美「ハンス・マカルトと皇帝の凱旋行進—デューラーが見た19世紀ウィーンの「歴史主義」—」池田祐子編著『ウィーン 総合芸術に宿る夢〈西洋近代の都市と芸術4〉』竹林舎、2016年、59-77頁。
- Erik Peterson, "Die Einholung Des Kyrios", in *Zeitschrift für systematische Theologie* 7, 1930, S.682-702; Andreas Alföldi, "Die Ausgestaltung des monarchischen Zeremoniells am römischen Kaiserhofe", in *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts. Römische Abteilung Bd. 49*, München, 1934, S. 1-118.
- 伝統的に地中海の東側地域を指す。
- Hans Conrad Peyer, "Der Empfang des Königs im mittelalterlichen Zürich", in Hans Conrad Peyer, Ludwig Schmugge, Roger Sablonier, Konrad Wanner, hrsg., *Könige, Stadt und Kapital. Aufsätze zur Wirtschafts- und Sozialgeschichte des Mittelalters*, Zürich, 1982, S.54ff.
- Winfried Dotzauer, "Die Ankunft des Herrschers. Der fürstliche Einzug in die Stadt bis zum Ende des Alten Reichs", *Archiv für Kulturgeschichte* 55, Berlin, 1973, S. 245.
- Dotzauer, S. 245f.; Anna Maria Drabek, *Reisen und Reisezeremoniell der römischdeutschen Herrscher im Spätmittelalter, Wiener Dissertationen aus dem Gebiet der Geschichte* 3, Wien, 1964 S.75; Peyer, S.56.
- 「入市」といわれるように、ある領域から別の領域に入る際に行われる儀式なので境界で執り行われる。「境界を越える」ことを重視していたことが分かる。
- マリオ山を越えて凱旋通りを経てローマへと至る。Dotzauer, S.246.
- Thomas Grünewald, [Review of *Adventus Augusti, adventus Christi. Recherche sur l'exploitation idéologique et littéraire d'un cérémonial dans l'antiquité tardive*, by P. Dufraigne], *Gnomon*, vol. 72, no. 5, 2000, pp. 426-30. JSTOR, <http://www.jstor.org/stable/40493056>. 最終アクセス2022年6月10日。
- 属州総督の巡行に関する慣習はより詳細に規定され、小ブリニウスが小アジアの属州使節団受け入れの際に明確に定め、その後ユスティニアヌスのローマ法大全に記載された。Dotzauer, S.246f.
- Drabek, S.76; Grünewald, S.426.
- Dotzauer, S.246f.
- アポロンは夏にはデロス、冬にはリュキアに滞在するとされ、ディオニソスは2、3月にアテネへ向かい、アフロディーテはエリュクス山からリビアに9日間滞在すると考えられていた。Dotzauer, S.247.
- Dotzauer, S.246ff.; Drabek, S.76; Peyer, S.56.
- Ernst Hartwig Kantorowicz, "The "King's Advent" and the enigmatic panels in the doors of Santa Sabina", in *The Art Bulletin, Vol. 26, No. 4 (Dec., 1944)*, 1944, p.213.
- Dotzauer, S.247f.; Drabek, S.75.
- 『マタイによる福音書』21章1-11、『マルコによる福音書』11章1-10、『ルカによる福音書』19章28-40、『ヨハネによる福音書』12章12-19。
- 『マタイ』25章1-13。
- 前2世紀にハスモン朝のシモン・マカバイがイェルサレムで受けた歓待の例。
- 『テサロニケ人への第一の手紙』4章15-16。
- Dotzauer, S.248; Drabek, S.76ff.; Peyer, S.56f.
- 東ゴート王国の建国者テオドリックは500年にローマで元老院や教皇、聖職者そして大衆に恭しく出迎えられている。東ローマ帝国皇帝フォカスと帝妃レオンティナの603年の入市の様子も蠟燭や乳香と一緒に描かれた。

- Dotzauer, S.248f.; Drabek, S.76f.; Peyer, S.57.
- 27 Dotzauer, S.249; Peyer, S.57; トゥールのグレゴリウス、兼岩正夫・臺幸夫訳註『歴史十卷（フランク史）Ⅱ』東海大学出版会、1975年、8-1、204-207頁。
- 28 'Vivat rex, regnumque eius in populis annis innumeris dilatetur.' 訳は兼岩・臺幸訳（204頁）に拠る。
- 29 'Omnes gentes te adorent tibi que genu flectant adque tibi sint subditi.' 兼岩・臺幸訳に拠る。
- 30 この称号に関しては真川明美「カール大帝による「ローマ人のパトリキウス」称号の受容をめぐる」『史学』（三田史学会）86-3、2016年、43-72頁を参照のこと。
- 31 Louis Marie Olivier Duchesne, ed., *Le Liber pontificalis; texte, introduction et commentaire par L. Duchesne*, vol.1, Paris, 1886, pp.496-497; Ferdinand Gregorovius, *Geschichte der Stadt Roma im Mittelalter : vom V. bis zum XVI. Jahrhundert*, Stuttgart, 1922, S.344f.; Dotzauer, S.249f.
- 32 Georgius Heinricus Pertz, ed., *Monumenta Germaniae Historica Scriptorum* (MGH SS) 1, Leipzig, 1925, S.257f.; Dotzauer, S.250.
- 33 Duchesne, ed., *Le Liber pontificalis*, vol.2, Paris, 1892, pp.87-88; Dotzauer, S.250.
- 34 現存する最古の歓待の祈祷文がスペインの西ゴート王国のものであることがローマ帝国とのつながりを示唆すると考えられている。また、ドイツにおける最古の文字による入市式の記述が、9世紀の修道士ヴァイセンブルクのオトフリートによるものであることからキリスト教との接触が入市式の導入につながったと考えられている。Dotzauer, S.249; Drabek, S.50f., 76; Peyer, S.57f.
- 35 Drabek, S.77f.; Peyer, S.58.
- 36 Drabek, S.73; Peyer, S.58, 60.
- 37 Dotzauer, S.253.
- 38 オットー1世はローマ滞在中に、ザクセンの皇帝代理ヘルマン・ビルングがマグデブルク大司教エセルベルトからマグデブルクで入市式を受けたことを知って大いに怒り罰を与えた。ハインリヒ4世の対立王ルドルフ・フォン・ラインフェルデンは、出迎えると王として承認したことになるとしてアウクスブルク司教エンブリコから出迎えを拒否されている。Dotzauer, S.251.; Peyer, S.60.
- 39 ハインリヒ2世の対立王マイセン辺境伯エッケハルト。
- 40 Peyer, S.60.
- 41 Dotzauer, S.253; Drabek, S.52; Peyer, S.60.
- 42 *regio more*（王国の習慣によって）、*cum tripudio*（宗教的踊りとともに）、*cum magna pompa*（大規模な祝祭行列とともに）、*cum honore susceptus est*（名誉とともに受け入れられた）などの表現とともに現れることが多い。Dotzauer, S.251; Peyer, S.58, 60.
- 43 Dotzauer, S.256f.; Peyer, S.60.
- 44 第2章1:準備参照。
- 45 修道院長と修道士が修練士や弟子を連れて儀式用の袖のない大外衣を着用して王を出迎える。行列の先頭に立つ3人の修道士は、中央が灌水器（図4）を持ち、両側は十字架を持つ。その後ろにも3人続き、行列用十字架（図5）を持つ者を中央に、両脇には吊り香炉（図6-1・2）を持った聖職者が位置する。更にその後方の5人は、両脇が燭台（図7）、中央の3人が福音書を持って進むよう定められている。Drabek, S.73f.
- 46 王の行列中に歌われる聖歌は「見よ、わが使者を遣わすのを *Ecce mitto angelum meum*」。王妃も王と同様の方法で迎えられるが、交唱は異なり、「人の子がその栄光の座につくとき *Cum sederit filius hominis*」と定められている。王の聖歌は出エジプト記23-20『マラキ書』3-1等から、王妃の聖歌は『マタイによる福音書』25-31からとられている。訳は『聖書』（日本聖書協会、1964年）を参照した。王と王妃で異なるのは到着者の地位にふさわしい頌歌と交唱が選ばれたためで、聖職者の入市式においても、司教や司祭枢機卿が到着した場合と、助祭枢機卿が到着した場合とでは違う歌が選ばれていた。Kantorowicz, S.217; Drabek, S.73f., 289; Peyer, S.67.
- 47 Drabek, S.74.
- 48 ザンクト・ガレン修道院にはノートケルらの修道士に書かれた9、10世紀の歓待用頌歌や国王・皇帝頌歌が残っている。
- 49 Drabek, S.74; Peyer, S.65ff.
- 50 *Ordo ad recipiendum regem vel principem processionaliter*, 及び *Ordo ad recipiendum reginam vel principissam processionaliter*.
- 51 Dotzauer, S.253; Peyer, S.66f.; Gerrit Jasper Schenk, *Zeremoniell und Politik: Herrschereinzüge im spätmittelalterlichen Reich*, Köln, 2003, S.102.
- 52 Schenk, S.226の表1参照。
- 53 Schenk, S.237の図式1参照。
- 54 シェンク以前にもマックス・ウェーバーらが試みている。Schenk, S.238.
- 55 Schenk, S.238ff.
- 56 Drabek, S.57ff.; Dotzauer, S.252.
- 57 Drabek, S.57ff.
- 58 Drabek, S.57ff.; Dotzauer, S.256.
- 59 Schenk, S.243f.
- 60 Drabek, S.32, 58.
- 61 Schenk, S.316.
- 62 Schenk, S.253f.
- 63 Schenk, S.249; Peyer, S.65.
- 64 警備の番に立つのは市民の義務であり、市外市民も例外ではなかった。Drabek, S.20f.
- 65 金印勅書では都市の安全も考慮され、フランクフルトでの国王選挙では選帝侯が都市に同伴できる騎士は200騎、そのうち武装したものは最大50騎と定められていた。金印勅書は1356年にカール4世が發布した帝国史上初めての基本法。Kaiser Karl IV., *Die Goldene Bulle: nach König*

*Wenzels Prachthandschrift; mit der deutschen Übersetzung von Konrad Müller und einem Nachwort von Ferdinand Seibt*, Dortmund, 1978, Kap.1-17, S.106; Schenk, S.251; 成瀬治・山田欣吾・木村靖二編『世界歴史大系ドイツ史1』山川出版社、1997年、311頁。

- 66 Schenk, S.251, 262f., 266f.
- 67 Schenk, S.248ff.; Alois Niederstätter, "Königseinritt und -gastung in der spätmittelalterlichen Reichstadt", in B. Altenburg, J. Jarnut und H. Steinhoff, hrsg., *Feste und Feiern im Mittelalter. Paderborner Symposion des Mediävistenverbandes*, Sigmaringen, 1991, S.492f.; Christoph Böhm, *Die Reichsstadt Augsburg und Kaiser Maximilian I.: Untersuchungen zum Beziehungsgeflecht zwischen Reichsstadt und Herrscher an der Wende zur Neuzeit (Abhandlungen zur Geschichte der Stadt Augsburg 36)*, Sigmaringen, 1998, S.176f.
- 68 市参事会が主催者となって君主を招待する形が一般的だが、市当局と優位を争う聖堂参事会が市参事会を出し抜いて君主を招待し、君主のお供の宿泊所手配というまみのない仕事だけが市参事会にまかされるという事件もあった。1489年のフリードリヒ3世とマクシミリアン1世のアウクスブルク入市より。Böhm, S.177.
- 69 情報収集が上手くいかないと国王に会い損ねるという事態も生じた。フリプールは国王ジギスメントに外交団を2つに分けて送ったが、ひとつめの外交団が派遣された都市には王はいなかった。Drabek, S.13.
- 70 Drabek, S.11に中世ドイツ語による挨拶文が載っている。
- 71 Drabek, S.12; Böhm, S.177f.
- 72 Drabek, S.10ff.
- 73 Schenk, S.250.
- 74 Schenk, S.253f.
- 75 Drabek, S.31; Niederstätter, S.491; Schenk, S.238ff.; Peyer, S.55.
- 76 Drabek, S.18ff.; Niederstätter, S.493.
- 77 Schenk, S.284.
- 78 1/2マイル、3/4マイル、1マイル、2マイルなど様々。Drabek, S.20.
- 79 Dotzauer, S.258; Drabek, S.19f.; Niederstätter, S.493f.; Schenk, S.284.
- 80 君主は巡幸時、基本的には車に乗って移動し、都市の市門の前まで来ると馬に乗り換える(図9)。Drabek, S.24.
- 81 Drabek, S.21.
- 82 Drabek, S.20f.; Niederstätter, S.493f.
- 83 Drabek, S.19.
- 84 Drabek, S.21ff.; Schenk, S.284f. 1432年に国王ジギスメントがバーゼルを訪問した際、聖堂参事会員が法衣でなく鎧を着けて現れたため王は非難している。Peyer, S.64.
- 85 Drabek, S.28.
- 86 1474年11月25日の皇帝フリードリヒ3世のフランクフルト入市では、都市側が1回目と同じ規模の入市式を打診したが皇帝側が断った。1回目の入市が同年1月末と期間がそう開いていなかったことも要因と考えられる。ただし、1回目の入市からかなり時間が経っている場合はその限りではなく、君主が断っても最初の入市式と同じ規模で執り行われた。Schenk, S.290.
- 87 Schenk, S.290f.
- 88 都市に特権を授与するほかにも、君主の威光を見せるという目的があった。Drabek, S.32, 58; Böhm, S.175f.
- 89 Schenk, S.289ff.; Peyer, S.61.
- 90 Schenk, S.262f., 345ff.
- 91 Drabek, S.25f.; Niederstätter, S.494; Peyer, S.64f.
- 92 「(主を)賛美せよ」で始まる詩篇148,149,150。
- 93 古くはハインリヒ2世の妻皇妃クニグンデの1020年の祈祷書の中に確認できる。Drabek, S.78f.
- 94 Schenk, S.346.
- 95 「ウィルトゥス」の原理については秋山聡『聖遺物崇敬の心性史 西洋中世の聖性と造形』(講談社、2009年)の第1章「聖遺物の力」中「神の力のメディア」(16-19頁)参照。
- 96 Drabek, S.26; Peyer, S.64f.
- 97 Drabek, S.28f, 97f.
- 98 Drabek, S.26f.; Niederstätter, S.494; Schenk, S.346ff.; Peyer, S.64f.
- 99 Schenk, S.347.
- 100 Schenk, S.346ff.;
- 101 1442年のフランクフルト市へのフリードリヒ3世の入市の際には、恭しい文句でありつつも都市にすぐに鍵を返すよう伝えている。Drabek, S.27.
- 102 Drabek, S.26ff.
- 103 Drabek, S.35f.; Niederstätter, S.496; Peyer, S.61f.; Schenk, S.350ff.
- 104 Drabek, S.36; Peyer, S.61f.
- 105 Schenk, S.350f.; Peyer, S.61f.
- 106 Drabek, S.36f.
- 107 Schenk, S.471.
- 108 Drabek, S.96; Schenk, S.455ff.
- 109 Schenk, S.462ff.
- 110 Drabek, S.27, 37ff.; Niederstätter, S.497; Schenk, S.455ff, 461.
- 111 Drabek, S.37ff.; Niederstätter, S.497; Schenk, S.472ff.
- 112 ごくまれに市参事会が国王夫妻に歓迎の贈り物として贈ることもある。1414年のクリスマス、コンスタンツ市の例。Ulrich Richental, *Die Chronik des Konzils von Konstanz*, hg. von Thomas Martin Buck (MGH DE I), 2019, A-Version c. 47. URL: <https://edition.mgh.de/001/html/edition.html#a66>; Drabek, S.37f. マクシミリアン1世もストラスブルク市から天蓋を贈られた。Schenk, S.477.
- 113 Drabek, S.38; Schenk, S.476f.
- 114 選挙が行われるフランクフルト、国王戴冠の地アーヘン、



- 東方の三博士の聖櫃が保管され伝統的に戴冠後に訪問されるケルン、ドイツの外ではローマ。Drabek, S.38; Schenk, S.479.
- 115 マクシミリアン1世の1486年の国王戴冠では2回の略奪がなされたことが記録されている。Drabek, S.38f.; Schenk, S.480.
- 116 首席軍務長官*Erzmarschall*、首席財務官*Erzkämmerer*、首席大膳職長官*Erztruchseß*、首席献酌長官*Erzschenke*のこと。
- 117 *Die Goldene Bulle*, S.140-141; Schenk, S.491f.; 横川大輔「14世紀後半における「金印勅書」(1356年)の認識：カール4世の治世(1378年まで)を中心に」『北大法学論集』63-2, 2012年、14-15頁。
- 118 帝国諸侯を帝国都市に、諸侯への封土授与を都市による誠実宣誓と読み替えた。Schenk, S.492.
- 119 ミッターイス＝リーベリッヒ、世良晃志郎訳『ドイツ法制史概説 改訂版』創文社、1971年、231頁。13世紀に国王オットー4世が放棄している。
- 120 王の聖なる力(霊力)に関しては、イギリスではノルマン朝以降、フランスではカペー朝以降に見られる王の療癒さわり(ロイヤル・タッチ)が知られている。神によって選ばれ塗油を受けた聖なる王が手で触れることで病が癒えたとされ、後に儀礼化もされた。マルク・ブロック、井上泰男・渡邊昌美訳『王の奇跡 王権の超自然的性格／特にフランスとイギリスの場合』刀水書房、1998年。
- 121 Drabek, S.43f.; Schenk, S.496ff.
- 122 Drabek, S.42f.
- 123 復活祭直前の日曜日に毎年行われる典礼。会衆は聖別された棕櫚の枝を持って行列する。枝の主日の行列では天蓋は用いられない。Schenk, S.465.
- 124 聖体行列との共通性を指摘する意見もある。印出忠夫「都市宗教儀礼を通じて見た中世都市のアイデンティフィケーション」『上智史学』38, 1993年、99-100頁。
- 125 Mark Mersiowsky und Ellen Widder, “*Der Adventus in mittelalterlichen Abbildungen*”, in *Ehbrecht Wilfried, hrsg., Der weite Blick des Historikers : Einsichten in Kultur-, Landes- und Stadtgeschichte : Peter Johaneck zum 65. Geburtstag*, Köln, 2002, S.81ff.; 印出、99-118頁。
- 126 訳は横川(2012年)1-56頁を参照。
- 127 Schenk, S.302, Schema 3より作成。
- 128 Drabek, S.23ff.; *Die Goldene Bulle*, Kap. 22, S.131; Niederstätter, S.495f.; Schenk, S.366ff.
- 129 ザーリア朝末期以降は巡幸に常に携行されたわけではなく、特定の場所に保管された。帝国剣、帝冠、聖槍、帝国十字架、帝国福音書、聖ステファノのブルサ、カール大帝の軍刀、戴冠式礼服が帝国権標の第一位を占める(図18-1・2)。H.K.シュルツェ・五十嵐修他訳『西欧中世史事典Ⅱ一皇帝と帝国一』ミネルヴァ書房、2005年、109-119頁。
- 130 *Die Goldene Bulle*, Kap.27, S.136-138, Kap.30, S.140-141; Schenk, S.303; 横川(2012年)、311-313頁。
- 131 Schenk, S.303f.
- 132 Drabek, S.24f.; Schenk, S.301.
- 133 1442年6月のことである。
- 134 Drabek, S.23f.
- 135 Schenk, S.306f.
- 136 市の歓待団も、君主の近くにより地位の高いものを配置していた。Schenk, S.306f.
- 137 ブランデンブルク辺境伯は入市式の3週間前に死亡したため欠席している。もっとも故・ブランデンブルク辺境伯はマクシミリアンのローマ王戴冠に長く反対していたので、ブランデンブルク辺境伯家の人間は次代も王の側近には加わらなかった。またボヘミア王はハンガリー王としてハプスブルク家と1440年代から対立関係にあり招待されていない。Schenk, S.310f.; Bence Péterfi, “Multiple Loyalties in Habsburg-Hungarian Relations at the Turn of the Fifteenth and Sixteenth Century”, in *Hungarian Historical Review 10-4*, 2021, pp. 621-652.
- 138 マクシミリアン1世の父フリードリヒはまだ存命だったので、行列ではフリードリヒの後にマクシミリアンが続く形で両者とも騎乗して行進した。天蓋は皇帝の頭上に掲げられた。Schenk, S.308f.
- 139 Schenk, S.308, 311.
- 140 Schenk, S.316ff.
- 141 1414年当時、国王ジギスムントは北イタリアで戦争中。1442年は古チューリヒ戦争の最中で、フリブールは国王フリードリヒ3世が率いる前部オーストリア*Vorderösterreich*、神聖ローマ帝国、チューリヒ、それらと対立するシュヴィーツとスイス連約者団との間で板ばさみになりかけていた。Schenk, S.261, 316f.
- 142 ; Niederstätter, S.495; Schenk, S.318.
- 143 君主のための儀典書は高位聖職者や教皇特使のための儀典書を再利用している部分も多く共通する儀式もあるが、君主の儀典書には聖職者であれば行う教会の守護聖人への祈りとミサ後の出席者たちへの祝福の部分が欠けている。Drabek, S.44f.
- 144 Dotzauer, S.258; Drabek, S.31, 44ff.; Niederstätter, S.495f.; Peyer, S.55, 66f.; Schenk, S.373.
- 145 前掲註46参照。伝統的な聖歌で当初は王が皇帝戴冠のためにローマに到着した際に歌われたもの。中世後期にはバーゼルやフランクフルト、アウクスブルクやシュバイヤーなどの都市の入市式で使われるようになった。Drabek, S.48f., 112.
- 146 Niederstätter, S.495; Schenk, S.375f.
- 147 4世紀の教父アンブロシウスの改革を通じて定められたとされ、神への賛美と感謝を歌う。国王選挙時に選帝侯が王を選出する前や、国王戴冠ミサの前にある叙階式の終盤に歌われていた。Drabek, S.49.
- 148 Schenk, S.375ff.

- 149 Schenk, S.381.
- 150 *In illo tempore: Exiit edictum a Caesar Augusto, ut describeretur universes orbis.*
- 151 このクリスマスの礼拝はカール4世によって導入されたと考えられている。Schenk, S.378f.
- 152 11世紀後半のビザンツ皇帝の戴冠式の際に始まった〈亜麻布を燃やす儀礼 *Wergbüschelbrauch*〉。教皇庁の復活祭とクリスマスの儀式に導入された後、12世紀の教皇即位儀礼に取り入れられ、15世紀にニュルンベルクで受容された。1414年の国王ジギスメントの入市、1442年の国王フリードリヒ3世の入市で記録がある。入市式では〈奉納〉における王の祈りと聖職者による集祷文の後に行われ、主任司祭が王の目の前で亜麻布、もしくは麻くずに火をつけて燃し、「いとも慈悲深き王よ、この世の栄華はかく消え行くのだ *serenissime rex transit gloria mundi*」と叫ぶ。当然君主にとって心地の良い儀式ではなく、1473年8月、当時56歳だった皇帝フリードリヒ3世は集祷文が終わるとこの儀式が始まる前に教会から出て行ってしまった。以後、この儀式がニュルンベルクで行われることはなかった。Drabek, S.62f., 124; Schenk, S.379f.; 甚野尚志「ローマ教皇の即位儀礼—中世盛期における定式化—」歴史学研究会編『幻影のローマ』青木書店、2006年、65-66頁; 甚野尚志「第3章ヨーロッパ史における「王権」の表象—教皇の即位儀礼」甚野尚志編『歴史をどう書くか』講談社、2006年、245頁。
- 153 Schenk, S.381.
- 154 Niederstätter, S.494.
- 155 Drabek, S.58f.
- 156 皇帝フリードリヒ2世の宣言による。ミッタイス＝リーベリッヒ、320-321頁。
- 157 Schenk, S.485.
- 158 Drabek, S.59.
- 159 君主だけでなく、同行している妃や子どもたち、貴族や宮廷役人にも贈られた。もちろん君主に贈られるものより価値は低く量は少ないなど、各々の地位に応じた内容である。Drabek, S.56.
- 160 Dotzauer, S.261f.; Drabek, S.53ff.; Niederstätter, S.497f.; Schenk, S.391ff.; Peyer, S.62f.
- 161 Drabek, S.53; Schenk, S.392f.
- 162 中世後期のヴィンタートゥールでは4 フィアテルViertel = 1 Mütt, 4 Mütt = 1 Malter  $\approx$  200kg. Ulrich Ruoff, u. a., hrsg., *Frühzeit bis Spätmittelalter (Geschichte des Kantons Zürich I)*, Zürich, 1995, S.504.
- 163 Drabek, S.54.
- 164 あまりに額が少なすぎて君主が受け取りを拒否した例もあり、その話は他の都市にも聞こえていた。Drabek, S.55.
- 165 Drabek, S.53ff.; Schenk, S.395.
- 166 Schenk, S.395.
- 167 Drabek, S.57; Peyer, S.54.
- 168 1475年の春に皇帝フリードリヒ3世がケルンを訪れたのは、前年からケルン大聖堂参事会の領地に侵入し、ノイス市を包囲していたブルゴーニュのシャルル突進公と戦うため。もっともフリードリヒは息子マクシミリアン1世とシャルルの娘マリー・ド・ブルゴーニュの結婚話を進めていたので(婚姻は1477年)、都市からの評判は非常に悪くなっていた。Drabek, S.54f.; 瀬原義生『ドイツ中世都市の歴史的展開』未来社、1998年、585-586頁。
- 169 1443年の1グルデンは35シリング、1486年では45シリング。1シリング=12ペニヒ。Ruoff, S.504.
- 170 Niederstätter, S.498.
- 171 1475年の段階で、帝国には忠誠を誓うが皇帝が嫡出ではないとして領主としての皇帝への忠誠を拒んでいた。瀬原、586頁。
- 172 Drabek, S.116.
- 173 瀬原、585-586頁。
- 174 舞踏会に王は私的に参加することができ、1442年のフリブール訪問時には、帝国色の服を身に付けた立派な身なりの市民とダンスを楽しんだ。Drabek, S.59.
- 175 南ドイツの宮廷では15世紀以降、野ウサギ狩りが特に好まれて行われた。Drabek, S.59.
- 176 Schenk, S.263.
- 177 お供の貴族が参戦し、訪問先の騎士とも対戦が行われた。王はごく少数の側近とともに観覧席で試合を楽しんだ。Drabek, S.59.
- 178 Drabek, 59ff.; Niederstätter, S.498f.; Schenk, S.400ff.
- 179 Schenk, S.401f.
- 180 極端な例ではアウグスブルク滞在中に父フリードリヒ3世が借金を支払うことが出来なかったことで、息子のマクシミリアンは1474年に市民から罵られ汚物を投げつけられている。もっとも後年マクシミリアンは、同都市で華々しい入市も経験している。C. Böhm, *Die Reichsstadt Augsburg und Kaiser Maximilian I.: Untersuchungen zum Beziehungsgeflecht zwischen Reichsstadt und Herrscher an der Wende zur Neuzeit (Abhandlungen zur Geschichte der Stadt Augsburg 36)*, Sigmaringen, 1998, S.176.
- 181 Peyer, Empfang, S.67f.
- 182 Drabek, S.80.; K. Tenfelde, "Adventus: Die fürstliche Einholung als städtisches Fest", in P. Huggel, hrsg., *Stadt und Fest zu Geschichte und Gegenwart europäischer Festkultur*, Stuttgart, 1983, S.45.; 上尾信也「ルネサンスの王権と祝祭本—ハプスブルク家とメディチ家をめぐって」『桐朋学園芸術短期大学紀要』2、2006年、156-185頁。

概念図

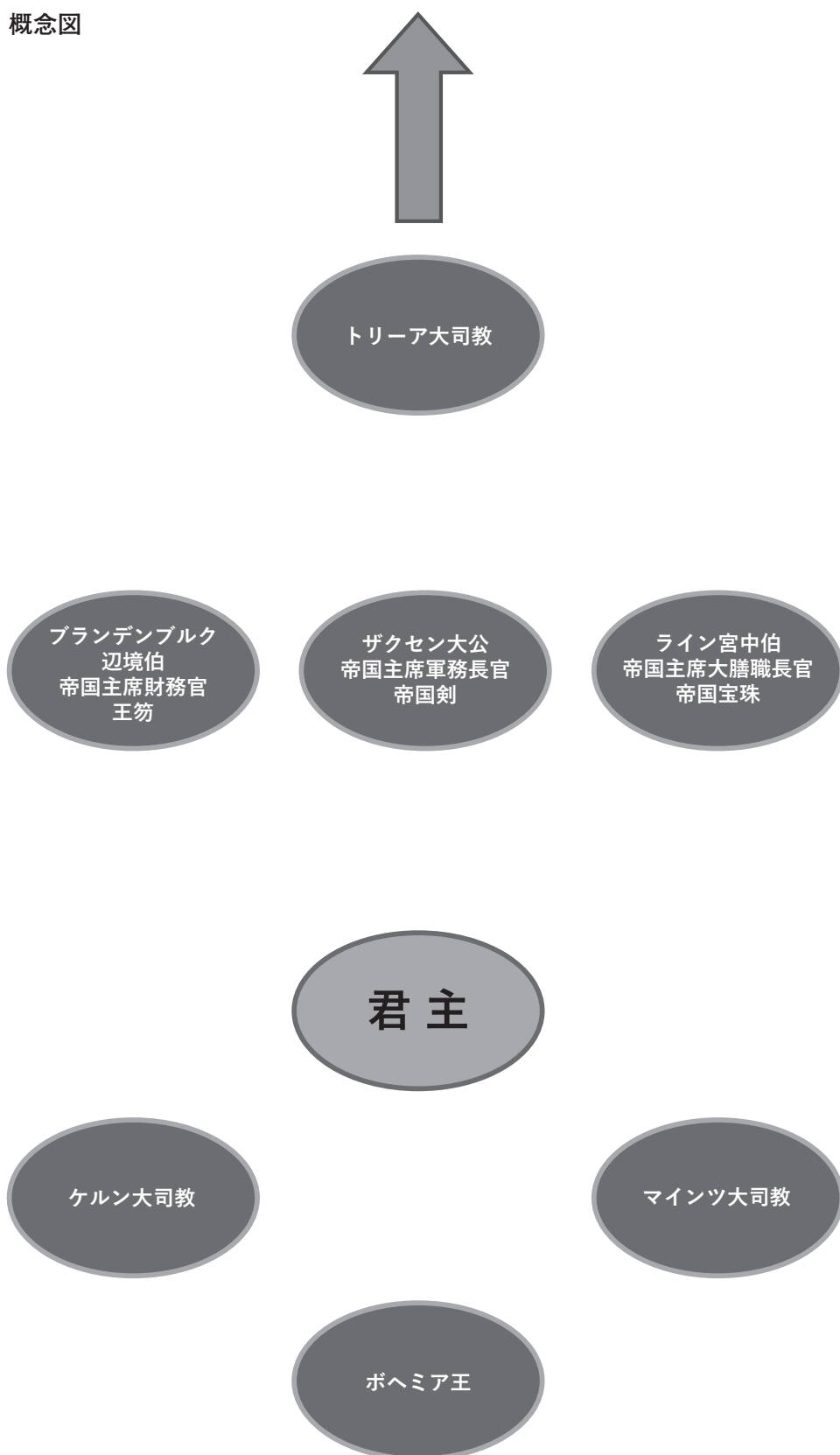






図1：アルブレヒト・デューラー、彩色素描《大凱旋車》16世紀  
Albertina, Wien



図2-1：市門より入市せんとするローマ皇帝コンスタンティヌス1世とガレー船。  
©The Trustees of the British Museum. Shared under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International (CC BY-NC-SA 4.0) licence.



図2-2：ローマ皇帝コンスタンティヌス1世のadventus  
«Source gallica.bnf.fr / BnF».



図3：マルカントニオ・ライモンディ《イエエルサレム入城：ロバに騎乗して市門へと進むキリストとマントを道に敷く老人（デューラーの模作）》16世紀  
歓迎する群衆が持っているのは棕櫚の葉である。  
The Metropolitan Museum of Art, Gift of Henry Walters, 1917



図4：灌水器（手前）

先端部が刷毛でできているものや、聖水の中を含むことができるように複数の穴が空いた金属製の球状のものもある。奥は聖水を入れる灌水容器。

Smithsonian American Art Museum, Gift of John Gellatly



図5：行列用十字架

下部に長い棒を差し込み掲げて行列を行う。

The Metropolitan Museum of Art, Gift of J. Pierpont Morgan, 1917

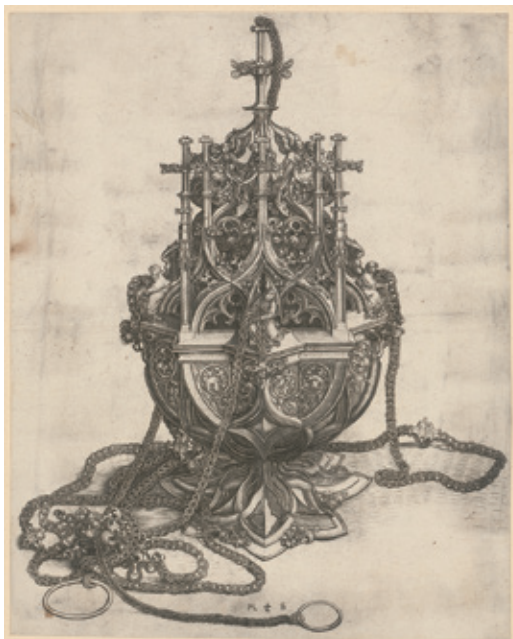


図6-1：マルティン・ショーンガウアー《吊り香炉》15世紀  
Kunstmuseum Basel, Kupferstichkabinett, Amerbach-Kabinett 1662



図6-2：吊り香炉  
The Metropolitan Museum of Art, Gift of J. Pierpont Morgan, 1917





図7：燭台  
The Metropolitan Museum of Art, Robert Lehman Collection, 1975



図8：ハンス・ホルバイン（父）《旅装で騎乗する皇帝マクシミリアン1世》16世紀  
巡行中の王は汚れても構わない質素な服装で移動した。  
Staatliche Museen zu Berlin, Kupferstichkabinett / Jörg P. Anders



図9：騎乗して入市する国王ジギスムント（1414年頃、ベルン）  
Bern, Burgerbibliothek



図10：国王ジギスムントを出迎える少年たち（1414年頃、ベルン）  
Bern, Burgerbibliothek





図11：聖遺物匣  
©Historisches Museum Basel, Peter Portner.



図12：聖体顯示台  
©Historisches Museum Basel, Peter Portner.



図13-1：国王ジギスメントに市門の鍵を差し出す  
ルツェルン市長（1417年頃）  
Korporation Luzern (depositum at the Zentral- und  
Hochschulbibliothek Luzern)



図13-2：バーゼル市長から鍵を受け取る  
国王ジギスメント（おそらく1433年）  
Korporation Luzern (depositum at the Zentral- und  
Hochschulbibliothek Luzern)



図14：天蓋の下で入市する国王ジギスメント（1414年頃、ベルン）  
Bern, Burgerbibliothek



図15：天蓋を聖遺物に譲る国王ジギスメント（1417年頃、ルツェルン）  
Korporation Luzern (depositum at the Zentral- und Hochschulbibliothek Luzern)



図16：帝国剣  
KHM-Museumsverband



図17：帝国宝珠  
KHM-Museumsverband





図18-1：帝国冠  
KHM-Museumsverband



図18-2：アルブレヒト・デューラー《カール大帝》16世紀  
帝国冠をかぶり、帝国剣と帝国宝珠を持っている。  
Albertina, Wien



図19：ハンス・ショイフェライン《カール5世の戴冠行列》  
：楽師、旗手、騎兵》15世紀末～16世紀中葉  
Albertina, Wien



図20：ハンス・ヴァイディッツ（子）《ミサを  
聴くマクシミリアン1世》1515年頃  
画面右中央で中央の祭壇に向かって祈祷台に  
跪いているのがマクシミリアン1世。  
The Metropolitan Museum of Art, Gift of Felix  
M. Warburg, 1920





図21：凱旋行列で運ばれる金細工食器類。  
Albertina, Wien



図22：豪華な装飾をされた部屋で食事のもてなしを受ける国王ジグスメント（1430年、ウルム）  
Korporation Luzern (depositum at the Zentral- und Hochschulbibliothek Luzern)



図23：ハンス・ブルクマイアー（父）《猪狩り（Theuerdankより）》1526年頃  
猪狩りをするマクシミリアン1世。  
© The Trustees of the British Museum. Shared under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International (CC BY-NC-SA 4.0) licence.